

ドレスの色彩嗜好と形態・素材との関係(85・86年)

東京家政大家政 ○長塚こずえ 雲田直子 木曾山かね

東京家政学院短大 今井弥生 中小企業大 志満津発司

目的 社会環境の変化に伴い、ファッションも増々複雑化、多様化している中で、学生が、自ら着用したいと考える夏向きのワンピース・ドレスをデザインさせ、その素材とスタイルとを分析検討して、被服造形のための基礎資料とすることを目的とした。

方法 1) 対象 東京家政大学服飾美術学科学生2年211名(内訳1985年115名, 1986年96名) 年齢19~20才 2) スタイル設定時期 1985年, 1986年夏 3) 検討 素材生地
の鑑別, 測色, 色調, 柄の傾向を分類し, スタイルについてはスカート, 衿, 袖, W・Lの位置, 全体のシルエットなどの傾向を分析した。

結果 素材は夏物のため, 両年共に天然繊維のしめる割合が多いが, 85年は綿が50%と圧倒的に多く, 86年は綿26%, 麻23.9%, 綿麻混紡19.8%で麻を嗜好する割合が高い。色彩は85年86年共に無彩色が約20%であるが, 色の好みはブルー系統が最も多く, 次にピンク, 黄が好まれ, 86年は紺の割合も多くみられる。又86年は無地を好む傾向が強くなり77%をしめ, 85年は水玉, 花柄プリント, 格子など柄物が53%になっている。スカートの形態は, 85年はギャザー, 86年はタイトなデザインが圧倒的に多い。季節柄衿なしが多く, スリーブも85年は袖なしが35%, 86年はフレンチスリーブが44%をしめている。全体のシルエットでは, オードックスな学生らしいシルエットを好む傾向と, 女性らしさを意識して体に合わせた細身のシルエットを求める傾向の二面性があるわけ, 学生は個性に合わせて敏感に流行を取り入れていることが考察された。